きみの物語をつくろう。

いたってシンプルな仕掛けだけがあり
緻密に練られた学びのデザインの中で

生徒たちが失敗しながら、自分を鍛えてゆきます。
あれこれと全て手を出してしまうのが正しい教育ではない。
自分を鍛えることのできる場と、励まし合える仲間、
見守りつつ、必要に応じて、指針を示したり、
手を貸したりする大人がいる。
学芸はそんな学舎として、歴史を紡いできました。
２万人を超える卒業生たちが
さまざまな分野で活躍しています。
学芸で自分の物語をつむぎあげて。

さあ、きみの物語を、つくろう。

四つの理想

時代をこえて、創りたい人材があります。
やり抜く力をもち
つまずいても立ち上がれる力をもったひとです。
それを礎（いしずえ）として
枠をこえた人材を育てたい。
人望のある、有為な人材を輩出したい。
その想いから、学芸では「めざしたい人間像」として
四つの理想を掲げています。

やさしい人になるように
ひらけた人になるように
ただしい人になるように
はたらく人になるように

そう、時代が変わっても
有為な人材には共通するところです。

未来をつくる第一歩を

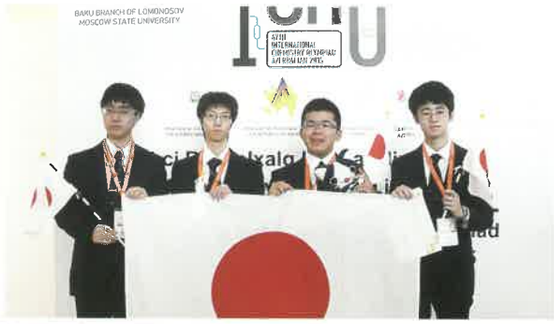
本校は、しつけの要点「やさしい人になるように、開けた人になるように、働く人になるように」を土台とした全人教育に、時代に応じた新たな取り組みを加えることで教育活動を進化させてまいりました。先の読みにくい時代、学力観や求められる力が変化しています。主体的に新しいことや答えのない課題にチャレンジし、根気強く取り組む姿勢の必要性がより高まっています。学芸が近年取り組んでいる「課題研究」の探究活動や「国際交流」はそうした姿勢を促すことをねらいのひとつとしています。

課題研究は令和2年度から中学にも取り組みを広げ活動の充実を図っています。生徒が興味関心を広げ、視点を増やし、考察する力を高めることで進路実現にもつながる学びになるように学校も研究をしています。

今、AIなどの科学技術が年々進歩しています。便利さが追求されすぎると、実感をともなって考え行動することが阻害されるのではないかと思うことがあります。学校は、様々な活動を行うときに、直に見る、生の声を聞く、触ってみるなど同じ場にいることで得られる感覚も意識させることを忘れてはいけないと考えます。

これからも学芸の伝統を時代の変化に対応させながら、教員も生徒も学び続ける学校でありたいと考えます。生徒の皆さんには学芸という環境で、未来をつくる第一歩を踏み出してほしいと思います。

高知学芸中学高等学校長
橋本和紀



国際化学オリンピック、国際生物オリンピックにて日本代表を輩出。

（※日本代表は全国で４名）

国際化学、生物オリンピックの日本代表になるには、予選（4000名以上）→本選（80名）→日本代表候補（16名）→日本代表選抜試験（４名）と、超難関を突破しなくてはなりません。本校ではここ数年で２名の日本代表を輩出。世界大会でも銀メダルを受賞するなど、有為な人材が出ています。

学生 VOICE

東京大学
理科二類（薬）合格
金久　礼武くん

生物という分野の魅力は、限られた種類の物質から環境に対応していく種がいくつもつくられていることで、遺伝や発生の仕組みを見ていると純粋にすごいと感じますね。日本代表の選考試験会場では全国の高校生たちと話せて、皆レベルの高い研究をしていると知っていい刺激になりました。

先生VOICE

理科　中平　信年先生

「探究」をやると受験の能力開発が促進されるぞという勘違いや、わかっていない人が教育関係者にも多いのですが、本来は「子どもの個性や資質を見つけていこう」という方向性を持つものです。外から詰め込む従来型の指導ではなく、一人ひとりの興味関心を掘り下げて、結果として自分で自分自身に「詰め込んで」いく。そういう「創造」の力を育む教育システムが日々研究されています。

科学の甲子園県代表として最多の全国大会出場。

科学の甲子園は、高校１～２年生８名が学校単位でチームをつくり、科学の知識や技能を競うもの。県大会に優勝すると県代表として全国大会へ進みます。本校はこれまで県代表として最多の全国大会出場を果たし、全国屈指の進学校と競い合っています。

「適応」と「創造」

さかあがりができる。九九が言える。漢字が書ける。発達段階に合わせて、いろんなことができるようになる。これを「適応」と言います。

社会生活へ「適応」させる力を、学校は育んできました。中高一貫の進学校ともなれば、受験勉強に対して高度に「適応」させるノウハウが蓄積されています。

一方で、それとは別に
「ママ、これ見て！　すごいがって！　知っちゅう？」
わが子が目をキラキラと輝かせ
未知の世界に驚いている姿を見て
「自分の得意を伸ばし、個性や資質を発見して
それを活かして、楽しんで人生を歩いていってほしい」
そういう願いも、親は持っています。
これは「創造」の力です。

今のこどもたちが大人になって出ていく社会は
高度な適応力に加えて
興味・関心の開発が必要な「創造」の社会へと
どんどんシフトしています。

「適応」と「創造」と。
どちらもやっていかないと、幸せがつかみにくい。
いま、そんな時代が来ているのです。

世界に触れよ、学生たち！

たとえば今、海外に行くのならば
東南アジアを見ておくのも、いいでしょうね。
活力にあふれた街の様子に、上昇志向の人々の熱気に
高度経済成長期の日本を想像できるでしょう。
そうすれば、人類の歴史を、肌感覚で
時間感覚として、とらえることができる。
若い頃であればあるほど
そうして感じた感覚と、自分の人生とを切り結んで
夢を描けたりするものです。

海外の姉妹校へ出かけることも
留学生と交流することも
自己の世界を広げ
複眼的にものを見れる人になってもらうためです。
大学進学を有利にしたり
早期学習でチャンスをつかむためだけに
英語を勉強するのではないのです。

【姉妹校との交換留学】

オーストラリア：ダラマーラン・カレッジ

オーストラリアの姉妹校と、短期留学で相互訪問を実施。訪問中はホームステイをしながらお互いの学校で通常授業を受講し、校外研修も楽しみながら親交を深め、主体的に英語を運用します。帰国後は英語学習への主体性が強まるだけでなく、異文化に触れた経験と日本での日常生活とを切り結んで、ものの見方を多面的にしてゆきます。

【英語弁論大会にて続々入賞】

英語学習の必然性を高める場の一つとして、高円宮杯全国中学校英語弁論大会へ例年参加。参加する中学生は校内予選も含めると全国で約10万人もいる（協会調べ）とされる中、本校は毎年のように全国大会へ出場。近年では全国 4 位に入賞してアイルランド研修（上位 1 名のみ）を勝ち取るなど、輝かしい成果を残しています。

【来日中の留学生と交流】

学芸では不定期で生徒会主催のイベントを実施。写真は来日中の留学生を学校に呼んだ時のもの。日本の文化を紹介しながら一緒に巻き寿司を作って食べました。アジアやヨーロッパからの留学生と交流する中で、参加した生徒は多くの質問を寄せ、「海外から見た日本や日本人」について知りました。互いの恋愛観について鋭く切り込む場面も（笑）

学生 VOICE

菅沼　祐大くん

高 1 のとき、ブラジルに行ってきました。決して治安は良くないけれど、現地の人々が人生を楽しんでいる様子に触れて、自分の進路や仕事についての価値観を考え直すきっかけにも。医療の現場を見た時には、得られるものはあっても、自分が渡せるものがないということに気づいて、専門性を持ちたい思いが強くなりました。

内なるものの「表出・表現」の機会を豊富に。

芸術の各分野に手をそめるとき、人はごく自然に「表現」ということを考えることになります。音楽であれ美術であれ書道であれ、実際に表現したものを自分の目や他者の目でながめてみて、それがどう評価されるかを知り、またそこから立ち戻って「自分はどう表現したいのか」を考えることになります。この「表現―評価」のプロセスをくり返す中で、優れたものは一体どこが優れているのかという「ものの本質をとらえる目」が育ち、やがて他の分野にもその目を応用できる人になっていく。子どもたちはこうやって徐々に成長してゆきます。

学生 VOICE

多摩美術大学
美術学部　合格
鍋島　柚葉さん

私は「行間のある」「思わせぶりな」表現が好きで、これまで「こわさ」「気味悪さ」をテーマに作品を生み出そうとしてきました。書きたいものを独自の視点で切り取ってなんとか表現できないか、考えてのめりこんでいます。

【生徒作品】

こども県展「知事賞」は高知県内から毎年１校だけが選ばれ、図画、毛筆、硬筆の３部門を総合的に考慮した総合優勝校に与えられるもの。本校はこの知事賞を県内最多で受賞しています。

いつもさりげなくそばにある

ふとした時間に、音楽が流れ
廊下を歩けば、書や絵画が目に入る。
そうしたことが、あたりまえな空間で
生徒たちは生活しています。

実学に偏りがちな時代にあっても
優れた人材を輩出する教育現場ほど
芸術教育に力を入れています。
高度の認知発達には、想像力が不可欠ですから
音楽・美術・書道の活動を通じて
想像力と感受性を豊かにしようとするのです。

導くことと、自立の支援と

生徒を大人扱いすることで、尊厳を持たせ
一方で、未熟な子どもの部分を見抜いて手を入れる。
学習の指導だけではなくて、生活においてもですが
これが中高生の指導の根底にあります。

自由や主体性を尊ぶといっても、放りっぱなしにはしない。
うっかりつまずくと、回復が図れないことがあります。
教材とノルマだけ与えて、週末課題漬けにしたりもしない。
そういう雑な指導だと、学習が作業になってしまいます。

学芸にも、いい意味での荒い指導はあります。
立ち上がることのできる程度に、厳しさに触れてもらう。
自分はできるんだ、という思いを、育てたいからです。
でも、「その子に応じて」「心と頭をよく見て」です。
ポキンと折れてしまってはいけません。

厳しさと、あたたかさと。
導くことと、自分でできるように手を放すことと。
その塩梅（あんばい）が、大事です。

集まることによって生まれる力が、確かにある。

マンツーマンの個人指導がもてはやされる状況がありますが、数十人での集団学習というのは非常に大事です。いい意味での学習ストレスがあり、上手な先生の手にかかると一つの目標ラインを教室集団で一丸となって越えていく力が生まれます。引っ張ったり、引きずられたりする感覚や集まることによって生まれる力は、向上心の盛んな思春期に、確かにあります。「みんなが頑張ってるから、なんか頑張れた」という感覚。個別指導と併行して、集団としての勢いが学芸で学ぶことの醍醐味だと言えるでしょう。

学校には、校風や文化があります。成長期に長時間、数年も通うとなると、多かれ少なかれ人格形成にも影響します。その十代をどんな集団で過ごしたかは、社会に出た後も学び方のスタイルや人間関係に直結。「基礎力のない意識高い系」がはびこりがちな時代ですが、学芸で育った子たちはやはり高い「基礎力」と「徳性」とを備えて社会に出てゆきます。

学生 VOICE

東京大学
理科一類　合格
松浦　有哉くん

休み時間には仲間とワイワイやっている教室が、ひとたび授業となると切り替えてバシッと集中する。そういうところが学芸の好きなところで、お互いを目標にしようとか、負けたくない、という気持ちでやっています。行事の時の団結力も含め、仲間と切磋琢磨できる環境がいいと思いますね。

目をかける。声をかける。手をかける。

「何をやればいいのか、わからない」
「どう勉強すればいいのか、わからない」
まだまだ、こんな悩みが多いのが、中高生のリアルです。
これに応えるのが、私たち教員の仕事です。

方法論なら、最近はずいぶん出回るようになりましたから本や、ネットなどで手に入れることも可能です。
で、その通りやってみる。でも、うまくいかない。
これ、本当に、よくあるケースです。

その勉強法が自分に合うのかどうかわからないまま
自己流で進めた結果、自信をなくしてしまったり
せっかくの向上心がくじけてしまったりする。
こんな残念なことはありません。

大きな仕事で成果をあげるためには
方法論を、自分の特性に合わせて運用する力が必要です。
学校は、子どもたちの生活をまるごと見ているからこそ
それぞれの特性に合わせ、タイミングをはかって
数ある引き出しから、そのつど、提案してゆけるのです。

いきなり教えないで、よく観察する。

美術科制作の一コマ。着眼のヒントをもらう。

個別指導において大切なのは、「いきなり教えない」ということだったりします。日常の学校生活の中で子どもをしっかりと観察して、面談で家での様子も把握します。今までの努力で身についていることはこれで、身についていないのはこれ。だから今まで通り続けていい勉強はこうで、これから意識的にやっていく勉強はこういうもの、としっかり示せるかどうかが教師の力の見せどころ。各教科において力のつけ方のデザインを「見える化」して示せること、具体的な行動レベルで提案できることが大事です。

学生 VOICE

高知大学
人文社会科学部　合格
石黒日向歌さん

受験が迫るほど何をどうやればいいかわからなくなりがちな中、先生がやるべきことを順序だてて示してくれるのが大きいですね。私に合ったやり方も示してくれるので、常に仕事の全体像を把握して進めることができます。進捗の報告や悩みの相談をした時に、頑張っていることをちゃんと見つけて肯定してくれる、認めてくれるのもやる気につながっています。

生徒が泣くことが、あります。
先生につらく当たられて泣いているのではなくて
自分の未熟な部分から目をそらさずに
先生と一緒に見つめるとき、涙が出ます。
願う結果を出せると、笑顔でまた泣きます。
生徒も、先生も、真剣なのです。

『V6の愛なんだ 2018　未成年の主張』撮影風景から。
全国放映で学芸生の個性が炸裂。大いに話題を呼びました。

V6が来たよ

生

徒会が主催して2階ロビーに笹のトンネルを設置。一人ひとりがオリジナルの吹き流しを作って吊り下げたり、短冊に願いを書いたりするとやっぱり楽しい！SNSと違って手触りのある交流が生まれます。

下右　教室のワックスびき作業もクラスメイト全員で。雑巾がけは一列で競争！

下左　卒業式前日の教室飾りつけ。黒板アートも窓の花紙飾りも男女協力して。

楽しんだもん勝ち。
だって
青春時代なんだからさ。

学生 VOICE

立命館大学
情報理工学部　合格
道倉　新士くん

僕らは勉強も部活もイベントも、ぜんぶこだわって楽しんでやりたいタイプ。抜いて、流してやるのって充実感もないからダメですね。だから仲間と一緒に面白がってやるのが最高！いろんなイベントで司会をしたりもしますが、どんな場でも自分たちの色で楽しんでやってますよ。

勉強ばっかしてるわけじゃないよ

やろうと思えば何でもやれる

全部学校が決めて、生徒は従うだけ。
そんなんじゃ何にもできない子になってしまう。
自分たちで決める経験を重ねていく。
主体性はそこから、育っていくものです。

たとえば文化祭。
クラスごとに屋台や教室出しものに取り組みます。
先生も手伝ってはくれるけど
計画も、製作も、運営も、会計報告も
何から何まで自分たちでやります。
きちんと申請をしたり、交渉をしたりすることで
どこまでもチャレンジできる
そんな「場」と「機会」が、もらえます。

やや難しいことこそ何とか実現したい。

文化祭ではクラスごとに出しものを。中庭の屋台では厳しい保健衛生条件をクリアして、実際に食品を提供します。お客さんの回転率を上げるために作業ラインを効率化する、試食会をひらいて改善を図るなど、美味しいものをたくさん提供するために知恵を絞ります。一方、教室では制作物による集客が。ジェットコースター（写真左上）は坂を下った後、スイッチバック式に。走行レーンの曲線部は竹材をうまく用いて安定化。楽しさと安全性の確保を狙っています。コーヒーカップ（写真左下）は金属製の土台と木製の上部の連結がカギに。土台の回転に加えてカップ自体もお客さんが回せる本格的なものになりました。ちょっと難しいんじゃないかと思われることにこそチャレンジし、短い準備期間で懸命に実現を目指す場です。

迷路を作るため教室をパネルで区切ることに。「限られたパネル数でどうすれば面白い設計にできるかな」「パネルはどうやって自立させるの？」「複数ルートにしてリピーターを呼びたいね」「それ予算内でできる？」「組めたよ。強度ＯＫ。スタッフのシフトは？」…話し合うことはたくさん。リーダーを中心に協力します。

学生 VOICE

岡山大学
理学部　合格
岡田那由多くん

昨冬の文化祭でバンド発表プロジェクト「みんなのうた」の企画・運営を担当。先生や業者さんとの折衝は学内外に及んで大変。でも本番はその分、実現できた喜びと自分の成長を感じてすごく嬉しかったです。

先生が、勉強しています

昨今の先生は、忙しくなっています。
毎日のあれこれに、追われています。
それでも、やっぱり先生は成長しないといけません。

子どもというものを知らなければ
成長を支えることはできません。
社会を見つめ、現在を正しく見つめられないと
本質を突くことができません。
どんな大学の問題でも解けなければ
教えることはできません。
何を、どうやればいいのかデザインできなければ
「がんばれ」しか言えません。
人生経験やバイタリティがなければ
子どもに夢は語れません。

学芸の教職員は、今日も勉強しています。

先人として
立ち止まらず
学び続けてゆく。

中学・高校とりわけ進学校の教員は、数学とか英語とかいう教科指導の学習だけしていると思われがちです。もちろん教科指導に長けていなければ他の学校と差別化できないわけで、そこに存在意義がありますがそれだけじゃない。学習や発達の理解であったり、時代を読んで未来を見通したり、普遍の原理や本質を見出したりできないとまずいでしょう。また思春期の子どもたちの前に大人の一代表として立つのですから、子どもたちの生き方を指し示す向きもある。小さな度量ではとうてい回せないはずです。いろんな先生がいてよいのが学校ですが、広範にわたって勉強している、いろんなことを知っている、研究している、考えている、話せる、聞ける、が必要なのは言うまでもありません。

「本質はどこ？」「やっぱりここでしょうね」「じゃ、こうしようよ」…異動のない私立学校の強みが「改善」です。

ベテランの先生が隙あらば逆に若手の先生から学ぼうとしてくるので、いつまでたっても追いつけなかったりします。

先生たちは教え方、学習と発達、そして教育原理を学び続けます。教室内外での実践と理論とを往復して、成長するのです。

学生 VOICE

早稲田大学
社会科学部　合格
今村　渚さん

学芸って、面識のない先生でも話しかけてくれて、関心を寄せてくれるので、頑張ろうって思えますね。授業では、もちろん問題を解くことも学ぶけれど、学ぶ内容を超えて先生の経験や現実の例とつないで示してくれるのが勉強になります。情熱的で頼りがいのある先生がたくさんいますよ。

学生 VOICE

高知大学
医学部　医学科　合格
林　大翔くん

僕は個人的に自転車競技をやってるんですけど、自転車部が無い中で、試合へのエントリーや引率を相談すると、聞き流さないで一緒に考えてくれて先生ができることを提案してくれる。授業の研究や進路のことだけじゃなくて僕たち一人ひとりの青春を応援してくれているのがよくわかります。

学年を超えて熱くなる日

学校行事は、
一つのことに仲間と一緒になって取り組むことで
互いをより深く理解するいい機会です。
また、勇気を与え、力をもらう経験を通して
自分の出力を最大に高めたり
集団としてのパフォーマンスを高める、その具体を学びます。
そして何より
仲間とのかけがえのない絆が育まれる瞬間です。

自治体制下で育つ
それぞれの主体性。

行事は主体性を発揮するためにも大事な機会。実行委員や各係のキャップの生徒がその仕事の一切を仕切る形になっているので、行事を成功させようと主体的に考え動くことに。体育祭を例にとれば、実行委員を中心に何度も会議を重ね、各チームへ下ろしたり意見を集約したりしながら計画。教員に要点のアドバイスを求めつつもあくまで自分たちで決めていきます。招集、誘導、準備、審判といった係の仕事もリーダーが会議の運営からリハーサル、反省会まで自治体制下で実施。だからこそ具体的な場を通して下級生が先輩の力を実感する瞬間が訪れ、来年はより良くしてやろうという想いも自然と育ちやすくなる。自分で考えて試行錯誤できる子たちが集まっているからこそ、自治体制のもとで主体性の萌芽を待てるのです。

学生 VOICE

立命館大学
経営学部　合格
片岡　大芽くん

1年生のとき、体育祭で先輩たちと一緒に応援団をやった団結感が楽しくて、それ以来、学年をこえてつながりができました。「経験することって大事で」とか「まずは試してみるのがいいんじゃない」とか、いい助言ももらえています。

学ぶことは同じだ、と気づく

ただただ、大量の時間をかけて
練習やトレーニングをする、というやり方は
本校でははできません。
学業との両立を図るには
限られた時間のつかい方が求められます。
それでも、勝利したい。成果を上げたい。
すると、おのずと工夫が求められることになります。
工夫し、考える頭は誰にもあるものですから
考えざるを得ない状況に置かれて、考えてやっていく。
要所をおさえ、事を知る。
部活動であれ、勉強であれ
同じことを学んでいるのだ、ということに気づくと
仲間と共に、ぐんぐんと成長していきます。

自ら進んで挑戦する場を、部活動にも。

文武両面において生徒が自ら進んで挑戦できることがたくさんあるのが学芸の特徴ですが、部活動もまたその一つ。部活の種類は県内外でも例をみないほど豊富に用意されているため、ほとんどの生徒が何らかの部に属し、全国大会にチャレンジする部も少なくありません。各自が自分の関心のある対象を通じて自己の可能性を広げようと活動しています。

中学校	高校
バレーボール部	バレーボール部
バスケット部	バスケット部
ソフトテニス部	ソフトテニス部
バドミントン部	バドミントン部
卓球部	卓球部
テニス部	テニス部
ソフトボール部	ソフトボール部
陸上部	陸上部
水泳部	水泳部
体操部	体操部
剣道部	剣道部
柔道部	柔道部
サッカー部	サッカー部
	弓道部
放送部	放送部
演劇部	演劇部
文芸部	文芸部
美術部	美術部
書道部	書道部
マンドリン部	マンドリン部
コーラス部	コーラス部
吹奏楽部	吹奏楽部
茶道部	茶道部
華道部	華道部
国際部	新聞部
理科部	写真部
	理科部
	囲碁・将棋部
	映画部
	英会話同好会
	料理同好会

学生 VOICE

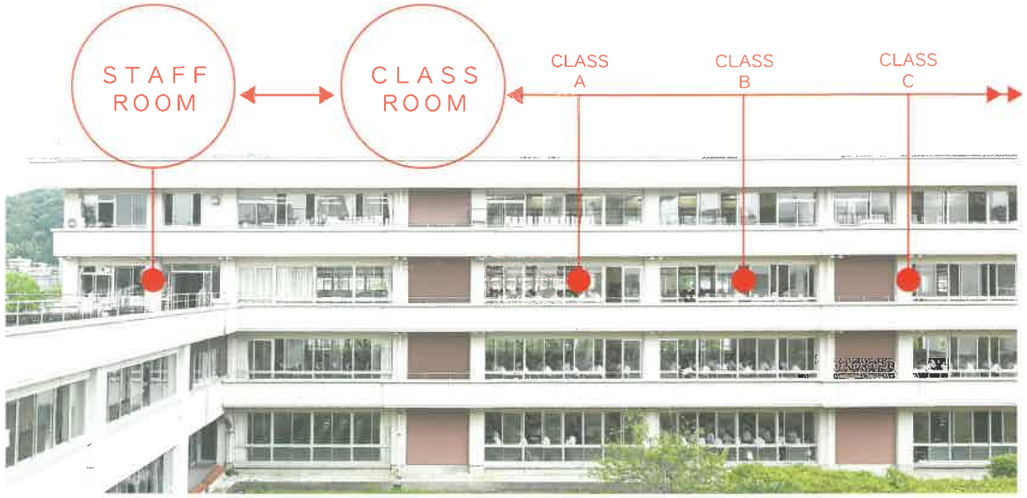
高知大学
医学部　医学科　合格
髙橋　結子さん

少しでも多く勝ちたい。だからそのためにどうしたらいいのか考えます。バレーボールは跳んだりボールを追いかけたりっていうこと自体も楽しいんですけど、団体競技なので仲間の気持ちが揃わないといけない。お互いの関係性をどう深めるかが大事な学びになります。

人も思考もぐるぐる廻る

高知でも他に類を見ないほど広大なキャンパス。
テニスコートに、2つのグラウンドに、2つの体育館。
設備の充実に目が行きがちですが
その中心にある校舎が、実は秀逸。
中学棟、中央棟、高校棟の3つが
渡り廊下でつながる「回遊式」のデザインです。
学生も先生も、目的の教室へ
あちらからでも、こちらからでも、行くことができる。
「今日はこっちから行ってみようぜ」
「大きな荷物を運ぶから、この動線がいいよね」
ひょっとすると
複数のアプローチが可能な、この校舎設計が
子どもたちの思考をぐるぐると
やわらかく、しなやかに、巡らせることに
一役かっているのかもしれません。

各学年の教室は一直線に配置。



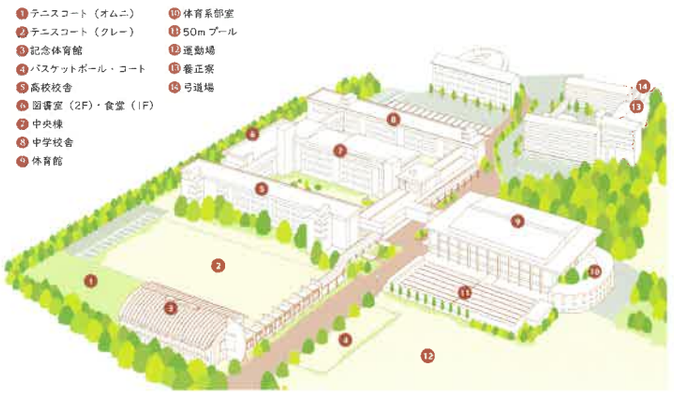
各学年の教室（5～6つ）は一直線上に配置。
その一端に、学年ごとの職員室があります。
担任がいつもすぐそばでスタンバイ。
質問や相談にも行きやすい距離感です。

上右　窓、窓、窓。とにかく窓が多い。明るい自然光の中で、語らい、学ぶ学生たち。

学生 VOICE

明治大学
政治経済学部　合格
大﨑日菜子さん

開放的な場所が好きな私は、校舎をつなぐ渡り廊下の屋上部分を歩くのが気に入っています。いつでも頭上に青い空が大きく広がり、雨上がりには虹がかかることも。中庭や赤レンガの道を見下ろすと下級生たちが遊んでいる様子が見えて、勉強の気分を切り替えるのにもおすすめです。



●校舎敷地／27,920㎡　●第2運動場／30,313㎡　運動場／31,307㎡　●寮敷地／7,718㎡　合計97,258㎡